

長崎大学の感染症に関する取組みについて
(第7回連絡協議会以降のプレスリリース)

※ 資料1のプレスリリースについてのお問合せは
国立大学法人長崎大学研究国際部研究企画課 阿南、山田、伊東までお願いします。
電話番号：095-819-2041

平成28年5月19日

関西ペイントの新製品開発に対する 本学 熱帯医学研究所の協力について

関西ペイント（本社大阪市）と関西ペイント販売（本社東京都）が5月20日に発表を予定しております漆喰塗料『アレスシックイ』の開発では、本学熱帯医学研究所の安田二郎教授が、抗ウイルス機能実証試験についてのアドバイスなど製品開発に協力いたしました。このアレスシックイの製品開発における安田教授の役割と新製品のもつ機能などにつきまして、メディアの皆様へ報告する場を設けましたので、ご多忙のところ恐縮ですが、お集まりいただけますようお願いいたします。

記

日時：5月24日（火）13:00～

場所：グローバルヘルス総合研究棟 5階 中会議室（長崎市坂本1丁目12-4）

※熱帯医学研究所の奥、熱帯医学ミュージアムの隣の建物です

出席者：安田二郎 熱帯医学研究所教授（新興感染症学）

笹川昌嗣 関西ペイント販売 建築塗料販売本部 マーケティング担当部長

※資料の準備の都合上、ご出席いただける方は 5月23日17時 までにご連絡ください。

※5月20日に東京で予定されている記者説明会にもご参加いただけます。関西ペイントからのプレスリリースを参考資料として添付いたします。

2016年5月9日

報道関係各位

関西ペイント株式会社
 関西ペイント販売株式会社

【漆喰塗料アレシックイ】
長崎大学熱帯医学研究所での抗ウイルス機能実証結果報告と
フレキシブル（弾性）漆喰塗料展開に関する記者説明会のご案内

関西ペイント株式会社（本社：大阪市、石野 博社長）ならびに関西ペイント販売株式会社（本社：東京都、毛利 訓士社長）は、長崎大学熱帯医学研究所安田教授のご指導の下、漆喰塗料『アレシックイ』の抗ウイルス機能実証試験をおこなってまいりました。

今般、この実証試験が終了しましたので、結果報告いたしますとともに、合わせて高機能フィルムや不織布などに塗工可能なフレキシブル（弾性）漆喰塗料についての製品発表をおこないます。

つきましては、本件に関する説明記者会見を下記の通り開催いたしますので、ご多用のところ恐縮ですが、ご参集賜りますようお願い申し上げます。

記

1. 日時 : 2016年5月20日（金） 午後1時00分～午後2時30分
 開場 午後1時00分
 記者発表 午後1時15分～午後2時00分
 製品展示紹介 午後2時00分～午後2時30分

2. 場所 : TKP東京駅日本橋 カンファレンスセンター カンファレンスルーム102
 東京都中央区八重洲1-2-16 TGビル本館
 TEL 03-4577-9242



3. 出席者 :

関西ペイント株式会社	関西ペイント販売株式会社
代表取締役社長 石野 博	代表取締役社長 毛利 訓士
汎用塗料本部(技術統括) 松本 幹男	取締役建築塗料販売本部長 中野 佳成
塗料事業部 技術開発第4部 部長 高野 亮	建築塗料販売本部 部長 岩崎 浩行
塗料事業部 技術開発第4部 丸中 理沙子	建築塗料販売本部 担当部長 笹川 昌嗣

国立大学法人長崎大学 熱帯医学研究所 新興感染症学分野 教授 安田 二郎様

以上

北教授らの研究により、マラリア制圧に大きな前進

長崎大学 熱帯医学グローバルヘルス研究科長を務める北潔教授らのグループが、3大感染症の一つで、寄生虫症のなかでも最も人的被害の大きいマラリアの制圧に関する研究で、2つの大きな成果をあげました。

マラリアの治療には現在、いくつかの抗マラリア薬が使用されていますが、最も新しい抗マラリア薬である「アトバコン」は、この感染症の原因であるマラリア原虫に耐性が出現しやすい点が問題でした。

北教授らの研究グループは、マウスを用いた実験で、アトバコンへの耐性の原因がマラリア原虫のミトコンドリア電子伝達系の「シトクロムb」の変異であることを証明しました。さらに、この耐性マラリア原虫が媒介昆虫である蚊のなかで増殖できるかどうかを調べたところ、薬剤耐性マラリア原虫は蚊の体内では増殖できないことが判りました。つまり、アトバコンの薬剤耐性をもつマラリア原虫が出現しても、マラリア流行地では拡散しないことがはっきりし、抗マラリア薬としての優位性が明確にされました。

この一連の研究は、北教授がインドネシアや自治医大と共同で行ってきましたが、このほどオーストラリアの研究グループと共同で、ヒトのマラリアで最も悪性な熱帯熱マラリアでも同様であることを示し、世界で最も権威のある米国の学術誌「Science」の4月15日号に掲載されました。

アトバコンは実際には「プログアニル」という薬剤との合剤として販売され、日本でも「マロン」という商品名で販売されています。しかし、非常に高価であり、先進国の旅行者の予防や治療には利用可能ですが、死亡者の90%を占めるアフリカの子供たちの予防や治療への使用は不可能です。

このような状況のなかで、北教授らはマウスを用いた実験で、サプリメントとしてすでにSBIファーマ（本社東京）から販売されている「5-アミノレブリン酸(ALA)」がマラリア原虫の増殖を抑制し、しかも治癒したマウスが再感染に100%抵抗性を示すことを突き

止めました。100%抵抗性を示すということは、免疫ができておりワクチンの代わりにもなるということです。

ALA は、がんの光線力学療法などでも利用されるなど高い安全性が実証されています。このことから、ALA がアフリカにおける抗マラリア薬として極めて有望なアミノ酸と考えられます。北教授らは、すでに試験管内で ALA がヒトに感染する熱帯熱マラリアの増殖を抑えることを確認したほか、マウスを用いた実験でその治療効果と再感染防御効果を確認しています。次のステップはヒトへの効果判定であり、現在、アフリカでの治験を検討しています。

今回、この ALA のマラリア制圧に関する有効性の研究が評価され、4月22日にポルフィリン-ALA 学会から学会賞を受賞しました。

マラリアは世界全体で年間に約2億人が感染し、60万人が死亡する重要な疾患です。北教授らの研究の進展により、マラリア制圧の可能性が大きく高まっています

平成28年6月23日

**重症熱性血小板減少症候群患者を対象とした
ファビピラビルの臨床試験の開始について
＜記者会見開催のご案内＞**

長崎大学 河野茂 理事・副学長は、愛媛大学 安川正貴 副学長および国立感染症研究所ウイルス第一部 西條政幸 部長とともに、マダニを介して感染する重症熱性血小板減少症候群（severe fever with thrombocytopenia syndrome: SFTS）に関する新規薬物療法についての臨床研究を開始いたします。

これに先立ち、長崎大学記者クラブの皆様を対象に、本臨床研究の詳細な内容及び県内で SFTS 患者が発生した場合の流れ等について説明する会見を、下記のとおり開催しますのでお知らせいたします。

記

1. 日 時 : 平成28年6月27日（月）9：30～10：30
2. 場 所 : 事務局第3会議室（長崎市文教町1-14）
3. 説明者 : 河野 茂 長崎大学理事・副学長
泉川 公一 長崎大学病院 感染制御教育センター長
森田 公一 長崎大学熱帯医学研究所長

平成28年6月24日

**「身近に迫る新興感染症の危機を考えよう」
留学生による出張授業を開催します**

今回は、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科の熱帯病・新興感染症制御グローバルリーダー育成所属プログラムに在籍する大学院生が、スーパーグローバルハイスクール(SGH)指定校である長崎東高へ出張授業を行います。

内容は、エボラ出血熱など比較的新しく認知され、局地的にあるいは国際的に問題となっている新興感染症について行います。高校一年生を対象とし、6カ国、8名の留学生が英語で行います。

今回の授業を通し、感染症に対する興味をはじめ、実際に留学生と話して分かる英語の重要性、進路を考えるきっかけとなればと考えております。

記

「身近に迫る新興感染症の危機を考えよう」

日時 2016年6月27日(月曜日) 16時30分～

場所 長崎東高等学校 〒850-0007 長崎県長崎市立山5丁目13-1

参加者 長崎東高等学校生徒

平成28年7月1日

ジカ熱の検査薬の開発について

妊婦が感染すると小頭症の乳児が生まれる可能性が高まるジカ熱が、オリンピックが来月開催されるブラジルで流行しています。長崎大学熱帯医学研究所では、このジカ熱の検査薬の開発を進めておりブラジルでの評価試験を予定しています。この検査薬の開発状況等について下記の日程で、メディアの皆様にご説明いたしますのでお集まりいただけますようお願いいたします。

記

日時：7月6日（水） 11:00～12:00

場所：グローバルヘルス総合研究棟 1階 大セミナー室

（坂本キャンパス：長崎市坂本1丁目 12-4）

説明者：森田公一 熱帯医学研究所長・教授

安田二郎 熱帯医学研究所教授（新興感染症学分野）

以上

平成28年7月13日

熱帯医学研究所カレトンリチャード准教授らが
四日熱マラリア原虫および卵形マラリア原虫のゲノム情報を解読

熱帯医学研究所カレトンリチャード准教授、ジュンカオ博士（中国）、アナブペイン博士（サウジアラビア）らの共同研究グループは、四日熱マラリア原虫と卵形マラリア原虫の全ゲノムシーケンス解析を行ない、それらの全ゲノム情報を解読しました。

この2つのマラリア種は熱帯地域の深刻な病であるにも関わらず、十分な量のDNAを確保するのが難しいために今までその遺伝情報が分かっていませんでした。今回の全ゲノム情報の発表は、今後新しい治療薬とワクチン開発に繋がるものと思われます。

成果は、国際科学雑誌『International Journal for Parasitology 電子版』（2016年7月5日）に発表しました。

※詳細はこちら

<http://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S0020751916301357>

平成28年7月29日

熱帯感染症診断システム開発に向けた
熱研と東芝メディカルとの共同研究開始について

国立大学法人長崎大学と東芝メディカルシステムズ株式会社（本社：栃木県大田原市、瀧口登志夫社長）は、熱帯感染症や新興・再興感染症を対象とする新たな遺伝子検査システム開発に向けた共同研究を開始いたします。この研究内容等につきまして、両者による共同記者会見をいたしますのでご案内いたします。

日 時： 平成28年8月3日（水） 15：30～16：30
場 所： 長崎大学文教キャンパス 第三会議室（長崎市文教町1-14）
出席者： 東芝メディカルシステムズ 宮口俊哉 常務
東芝メディカルシステムズ 後藤浩朗 分子検査ソリューション
事業推進部部長
長崎大学熱帯医学研究所 安田二郎 教授（新興・再興感染症分野）

TICAD VIプレイベント:国際シンポジウム ～日ア学術研究50周年、21世紀のアフリカ学術協力にむけて～ が7月21日にナイロビ(ケニア共和国)で開催されました。

いいね! 19 ツイート G+1 0 Bookmark 0

2016年08月19日

8月27日～28日の期間、ケニアで開催されるTICAD VI(第6回アフリカ開発会議)の公式イベントとして、日本学術振興会(JSPS)、京都大学、長崎大学が共同で、アフリカにおける学術研究50周年を記念するシンポジウムを開催しました。

長崎大学は1966年にアフリカに第一次医療団を派遣して以降、感染症対策を中心にアフリカでの活動を展開し、今年で50年目を迎えます。また、日本学術振興会ナイロビ研究連絡センターは設立50周年、京都大学アフリカ学術研究も50周年を迎えます。

本学から、片峰学長、夢田副学長、清水工学研究科長、萩原水産環境総合研究科長、北熱帯医学・グローバルヘルス研究科長、青木名誉教授などが出席しました。青木名誉教授からは、長崎大学アフリカ研究の50年の歴史について、青木名誉教授ご本人のケニアでの経験を元にご講演いただきました。

シンポジウムには、現地の政府要人やカウンターパート機関からも多くの出席があり、アフリカ各国で研究する研究者はじめ、総勢約150名が出席しました。

8月のTICAD VI本会議を前に、アフリカ各国で研究する幅広い分野の研究者が集結し、ともに互いが歩んできた50年を振り返り、50年という歳月が築き上げてきた教訓を糧に、日本・アフリカの学術協力・共同研究のこれからの50年に向け、参加者それぞれが新たな一歩を踏み出すことができる1日となりました。

JSPSナイロビセンターのシンポジウム報告はこちら(開催の経緯や各機関詳細があります)

<http://www.jspnsnairobi.org/activity/2025.html>



開会挨拶をする片峰学長



会場の様子



挨拶する植澤利次 駐ケニア特命全権大使



感染症対策、新薬開発について説明を行う、北熱帯医学・グローバルヘルス研究科長



長崎大学50年の軌跡をプレゼンする青木克己名誉教授



文化人類学の観点からプレゼンする増田研准教授



パネルディスカッションの司会を行う熱帯医学研究所金子聡教授



工学分野での協力について発言するパネラーの夢田副学長



集合写真

《撮影》久野武志

片峰茂学長がケニアで開催された「第6回アフリカ開発会議 (TICAD VI)」に参加

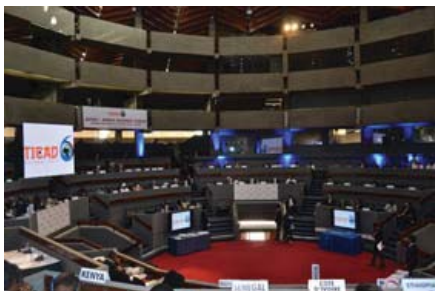
いいね! 6 ツイート G+ 0 Bookmark 0

2016年08月31日

片峰茂長崎大学長は、8月27日、28日にケニアのナイロビで開催された「第6回アフリカ開発会議 (TICAD VI)」に出席し、8月27日に開催されたテーマ別会合「質の高い生活のための強靱な保健システム促進」やケニヤッタ・ケニア大統領との経済ミッションの会合などに参加いたしました。

今回のTICAD VI参加は、長崎大学が長年にわたり実施してきた、ケニアをはじめとするアフリカ各国での教育研究の取り組みや医療支援活動が認められたもので、片峰学長も安倍晋三首相の主要な随員メンバーとして参加いたしました。このほか、本学からは、国際交流担当の多田彰秀副学長、水産・環境科学総合研究科の萩原篤志研究科長、熱帯医学研究所の森田公一所長、有吉紅也教授、金子聰教授、国際連携研究戦略本部の平岡久和准教授らを派遣、ケニアに駐在するアフリカ教育研究拠点長の一瀬休生教授とともに、TICAD VIの関連イベントなどにも参加いたしました。

個々の活動の詳細につきましては、近日中に、大学ホームページでご紹介する予定です。



片峰茂学長は8月27日のビジネスセミナーで長崎大学の取り組みを発表



片峰茂学長が安倍晋三首相の随員メンバーの1人としてTICAD VIに参加した(写真右は多田彰秀長崎大学副学長)



セーシェル大学との学術交流協定調印式(セーシェル大学のハーディ・デニス副学長と)



TICAD VIでは企業や大学・研究機関が多くの協定締結が行われた。長崎大学とセーシェル大学の交流協定も取り上げられた

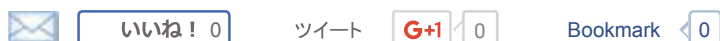


ケニアで長崎大学との共同研究を進めるNECもジャパン・フェアにブースを金子聰教授が訪問(右は平岡久和准教授)

外務省TICAD VIに関する情報ページへのリンク

http://www.mofa.go.jp/mofaj/af/af2/page3_001556.html

日本における青年期以降のヒトT細胞白血病ウイルス1型(HTLV-1)新規感染者の実態が明らかに



2016年08月31日

長崎大学医歯薬学総合研究科の岩永正子教授、日本赤十字社、東京大学、国立感染症研究所の研究者らによる共同研究チームが、約300万人の献血者データのヒトT細胞白血病ウイルス1型(HTLV-1)の新規感染状況を疫学的に解析し、日本における青年期以降のHTLV-1新規感染者の実態を初めて明らかにしました。

ヒトT細胞白血病ウイルス1型(HTLV-1)は母乳を介して乳児期に感染する事が知られていますが、青年期以降の新規HTLV-1感染については詳しいデータがありませんでした。研究チームは、日本赤十字血液センターの全国献血者データベースをもとに、過去にHTLV-1抗体検査が陰性だった献血者で、その後陽性に転じた者の割合を後方視的コホート手法で解析し、陽転者は10万人年あたり男性1.29人、女性6.88人と女性が有意に高かった事を明らかにしました。さらに、陽転率を日本全国の人口動態に外挿したところ、日本全国における新規HTLV-1感染者は年間あたり男性975人、女性3215人と推定されました。

なお、本研究は、英国の学術誌The Lancet Infectious Diseasesの2016年8月23日付けの電子版に掲載されました。

【論文名】

Incidence of human T-lymphotropic virus 1 infection in adolescent and adult blood donors in Japan: a nationwide retrospective cohort analysis

【著者名】

Masahiro Satake, Masako Iwanaga, Yasuko Sagara, Toshiki Watanabe, Kazu Okuma, Isao Hamaguchi

【掲載先】

Lancet Infectious Diseases のHP: <http://www.thelancet.com/journals/laninf/onlineFirst>

NCBI PubMed: <http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/27567105>

【研究チーム】

日本赤十字社 血液事業本部 中央血液研究所	佐竹正博
長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 フロンティア生命科学分野	岩永正子
日本赤十字社 九州ブロック血液センター	相良康子
東京大学名誉教授	渡邊俊樹
国立感染症研究所 血液・安全性研究部	大隈 和
国立感染症研究所 血液・安全性研究部	浜口 功

